

高校格差再考

——高校教師調査 2017 からの考察——

○武内 清(敬愛大学客員)

○黄 順姫(筑波大学)

○浜島幸司(同志社大学)

1. はじめに

1.1 本報告の目的

戦後高校進学率が上昇する中で、学力（偏差値）による輪切り選抜がすすみ、高校間格差が出来、学校経営方針、授業形態、生徒指導、教師・生徒関係、生徒文化も高校格差間で大きく違いがみられた。

今から 35 年前に実施された深谷ら（1983）の教師調査のデータでは、進学校の教師ははじめに勉強する多くの生徒に対して授業中心の指導を行い教師としての自信を強めていたが、非進学校の教師は、勉強に興味を示さない反抗的な多くの生徒に対する生徒指導で疲弊し教師としての自信も失いがちであったことが示されている。

その後、高校の多様化政策、受験競争の緩和、推薦や AO 入学の増加、少子化などにより、高校教育の状況や教師や生徒の生活や意識は大きく変化していったことが考えられる。

樋田ら（2000）は 1979 年度と 1997 年度に同じ学校で高校調査を行い、高校間格差の弛緩（「トラッキングの弛緩」）をデータで検証しているが、トラッキングの弛緩は必ずしも検証されなかった。

本発表は、最近（2017 年 10 月）に行った全国の高校教員調査のデータから、高校間格差の現実を、その弛緩も含め教師の目から検証しようとするものである。

高校教育のさまざまな側面にみられた学校間格差は、現在も存在するのであろうか。また学校間の格差は教育的には何を意味するのであろうか。それは出身階層などの属性ではない学力や意欲といったメリトクラシーの指標と解釈するべきであろうか。

高校格差間のさまざまな様相、つまり教師の属性、キャリア、教科指導、生徒指導、部活動指導、同窓会、教育観、教育改革観などの違いとその意味を考察して、高校間格差の

意味を再考してみたい。

本報告は以下の内容でおこなう。

2. 高校格差と生徒の特質（武内）
3. 高校格差と教師（浜島）
4. 高校格差と同窓会（黄）

1.2 調査の概要

分析に使用する調査データは、(公財)中央教育研究所が実施した「高校教員調査 2017」である。

調査時点：2017 年 10～11 月。調査方法：全国の普通科のある公立高校 3806 校から無作為に 11 分の 1 の抽出率で 350 校に調査を依頼。1 校につき 7 名の教師に調査を依頼。郵送法：回収数 764 名（回収率 31.2%）。

1.3 回答者の属性

性別；男性 70.2%、女性 29.7%。

年代別；20 代 14.4%、30 代 21%、40 代 26.8%、50 代 36.1%、60 代 1.7%。

学校間格差別；「4 大進学率 30%以下（Ⅰ）」37.7%、「31～50%（Ⅱ）」13.6%、「51%～79%（Ⅲ）」13.6%、「4 大進学率 80%以上で難関大学 10%以下（Ⅳ）」12.7%、「4 大進学率 80%以上で難関大学 11%以上（Ⅴ）」13.3%。

（武内清）

2. 生徒の特質の高校間格差

2.1 勤務先にいる生徒

表 2-1 は、「現在勤務している学校には、次のような生徒がどれくらいいますか」と教師に聞いて「ほぼ全員」と「7 割くらい」と答えた割合を、学校間格差別に示したものである。

また超進学校には「熱心に授業を受ける生徒」「授業の予習・復習をする生徒」や「受験勉強に打ち込む生徒」が多く、非進学校にはそれらは少なくなっている。部活動や学校行事に熱心に参加すること生徒も進学校に多くな

っている。「推薦入学をめざす生徒」準進学校に多い。「校則を守る生徒」は進学校に多いが、非進学校でも7割の生徒は守っている。

表 2-1 学校にいる生徒

(全員+7割)%	I	II	III	IV	V
友人関係を大切にする生徒	73.9	84.7	95.0	93.7	91.9
校則を守る生徒	69.8	82.7	90.1	93.7	90.9
学校行事に積極的に参加する生徒	57.0	71.1	84.5	79.0	93.2
進路を真面目に考えている生徒	41.7	43.2	64.0	76.8	87.9
部活動に熱心な生徒	38.5	53.8	71.4	82.1	82.8
熱心に授業を受ける生徒	36.5	44.3	67.7	83.2	85.9
大学への推薦入学をめざす生徒	5.2	21.2	28.0	7.4	6.0
受験勉強に打ち込む生徒	4.1	9.6	46.6	79.0	89.9
予習・復習をする生徒	3.1	7.7	20.5	45.2	63.6

2. 2 進路指導で感じること

表 2-2 は、「現在教えている生徒の進路について、次のように感じることはありませんか」と聞いて、「とても」と「やや」感じる割合を、格差別に示したものである。

「理系の進路を選ぶ女子」「海外への進路に興味を持つ生徒」は進学校に多く、「進路を決められない生徒」と「経済的な理由で希望の進路に進めない生徒」は非進学校に多いことがわかる。

表 2-2 学校にいる生徒の傾向

(とても+やや)%	I	II	III	IV	V
経済的理由で希望の進路に進めない	88.2	77.9	62.8	48.4	47.4
進路を自分で決められない生徒	85.4	87.5	83.2	74.7	66.7
海外の進路に興味を持つ生徒	10.1	16.3	32.3	23.2	42.4
理工系の進路を選ぶ女子生徒	7.6	12.5	26.1	32.7	58.6

2. 3 自由記述より

教師から次のような報告もある。

- ・いわゆる底辺校と言われる高校に通う生徒の実態を見て欲しい。行きたい高校もなく目的意識も持たず、ただ皆が行くからという理由で入学し、入学後も努力することなく、ダメなら退学すればいいやと割り切っている生徒がいかに多いことか。バイトに明け暮れ授業中は寝ている。他方で、発達障害の生徒もこれまた多数いる。(女性、40代、I)
- ・〇〇高校だからすごい、〇〇高校だからちょっとね、と言う人がいる。本校の生徒は学力が低い、人間として、生徒として、素晴らしいものがある。挨拶や、素直さ、等々、そういったところを見てほしい。(男

性、50代、I)

- ・生徒及び家庭の状況が多様化、複雑化しており、一括した指導の難しさを感じています。さらなる個別指導が必要だと思いますが、それに対して教員の人数と時間が足りていないのが現状です。現在、その足りない部分が外部機関で補われているため、「経済格差」＝「教育格差」の構図が生まれている。(男性、20代、V)

(武内清)

3. 高校教師

3.1 キャリアの高校間格差

本サンプルでの格差別の教師のキャリアを示したものが表 3-1 である。非進学校所属の教師に教員経験年数および勤務校が少ない。進学校にキャリアが長い教師が多い。

表 3-1 教師のキャリア項目

	I	II	III	IV	V
教員経験年数					
5年以下	20.2	10.6	14.9	13.7	14.1
6～10年	17.8	14.4	10.6	7.4	8.1
11～20年	18.5	24.0	17.4	21.1	23.2
21～30年	24.0	31.7	31.1	36.8	30.3
31年以上	19.5	19.2	26.1	21.1	24.2
現在の勤務校は何校目か					
1校目	18.1	10.6	11.2	11.7	7.1
2校目	17.7	17.3	15.5	9.6	16.2
3校目	14.2	23.1	19.3	23.4	25.3
4校目以上	50.0	49.0	54.0	55.3	51.5

3.2 高校教師の地位、仕事の高校間格差

役職「なし」が半数を占めている(表 3-2)。また、どの教師も忙しい(図 3-1)。

表 3-2 役職「なし」と担任「有」の割合

セル内は%	I	II	III	IV	V
役職「なし」	49.1	52.4	48.1	46.3	50.5
担任「している」	39.5	42.3	25.5	33.0	38.5

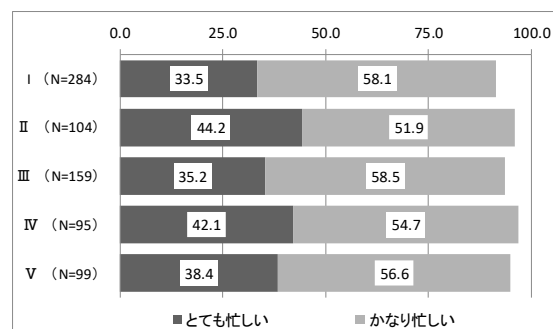


図 3-1 日々忙しいか

3.3 教育指導の高校間格差

表 3-3 は、教師が日頃していること（とても＋かなり）を格差別に示したものである。進学校の教師の方が非進学校の教師に比べ「教科の専門書に目を通している」が多少多いが、その他の項目（生徒の質問への対応、授業の工夫、生徒指導、講義ノート作成、部活指導、デジタル教材の使用）に関して、ほとんど学校間格差による差はない。

表 3-3 日頃していること

(とても＋かなり)%	I	II	III	IV	V
生徒の質問に親身に答える	96.1	92.2	94.4	95.8	95.9
授業の工夫をしている	86.5	81.8	81.4	83.2	88.9
生徒指導に力を入れている	76.4	74.1	67.7	64.2	66.7
保護者対応に熱心	74.3	72.2	73.9	65.3	83.8
教科の専門書に目を通す	62.1	63.5	58.3	60.0	76.8
講義ノートを作っている	58.0	62.5	58.4	53.7	54.6
部活動を熱心に指導	47.2	51.0	46.0	51.6	44.4
デジタル教材の使用	32.3	42.3	31.7	31.6	36.3

30年前に実施された教師調査のデータ（深谷他，1990）をみると、教育指導の学校間の格差はかなりあった。

このように、生徒の特質に関しては、今も依然学校間格差があるものの、以前にみられた教師の指導の特質の学校間差は少なくなっている。

3.4 高校教師の授業観の高校間格差

授業で「とても大事」だと思っていることは、表 3-4 に示したように「基礎的な力のつく授業」、「生徒が興味や関心の持てる授業」が全体的に高いことがわかる。アクティブ・ラーニングや受験への対応は学校間格差がみられる（進学校ほど高い）。他方、「デジタル教科書・教材を使った授業」は全体的に重視されていないことがわかる。

表 3-4 授業で大事と思うこと

(とても大事)%	I	II	III	IV	V
基礎的な力のつく授業	82.3	83.7	83.2	80.0	82.8
生徒が興味や関心を持てる授業	77.1	73.1	75.2	69.5	79.8
職業に結びついた授業	30.9	27.9	18.0	21.5	28.3
アクティブ・ラーニング	26.1	27.2	28.0	27.4	34.3
受験に対応した授業	18.8	25.0	42.9	57.9	54.5
デジタル教科書・教材を使った授業	7.6	7.8	11.2	9.7	11.1

3.5 教師の教育改革観の高校間格差

高校教師は、教育に関心が高いというよりは、自分の専門の教科への関心が高い。図表は略したが本サンプルでは一般の大学の出身者が 72.8%いて、教員養成系出身者が 27.1%と少ないせいもあるだろう。それにともない高校教師は、教育改革や学習指導要領の改訂に関する関心も低い。

ただ、これにも高校間格差があつて、表 3-5 のように、新しい教育改革の動向や新学習指導要領の動向に敏感に反応し関心を持っているのは（超）進学校の教師たちである。非進学校、準進学校の教師は生徒指導の大変さや現状維持志向から新しいものへのコミットメントは弱い。

表 3-5 学習指導要領の改訂への関心

(非常に＋ある程度)%	I	II	III	IV	V
教育課程の改定※「非常に」のみ	28.8	40.4	36.6	36.8	43.4
英語コミュニケーション	26.5	16.3	18.0	20.0	31.3
教科横断的学習	22.2	26.0	27.3	25.3	36.4
理数探求、日本史探求等	0.0	20.2	16.9	21.1	36.4

(浜島幸司)

4. 高校格差と同窓会

4.1 高校の資本としての同窓会・卒業生

同窓会は学校の組織ではないにしても学校と心理的・文化的・社会的・政治的な面で関連する組織であり、学校を活性化・維持するために活用できる支援組織である（黄，1998 2007）。同窓会・卒業生より、経済的、社会的、文化的資本を動員・活用できる学校は、教育に投資する資本の種類・質・量の面で有利であり、学校運営の安心・安全を確保する可能性が高い。

本調査の結果、全体として同窓会・卒業生の支援状況は、補助や支援してくれる（とても＋ややさう思う。以下同様。）が 63.5%である。また、補助や支援してほしいは 62.8%、学校側の立場では圧力と感ずることがある、が 17.5%、少子化時代に学校のサポート組織になれる、が 64.3%である。従って、教師による同窓会・卒業生への期待は全体で 60%を上回っていることがわかる。援助・支援の内容は、自由回答から類型化すると、進路（進学・就職、キャリア・インターシップ）の指導・助言、部活動への経済的及び技術・相談の人的支援、進路関係行事・文化祭・運動会など学校行事への支援、学校の周年への寄付や行事参加等多様化している。

4. 2 同窓会支援の高校格差

高校格差別に援助・支援の実態・期待・圧力・サポート組織イメージは、表 4-1 に示した通りである。支援・援助は、IV、V 類型の進学校の方が高く、期待やサポート組織へイメージも高い。進学校は他の学校よりも同窓会・卒業生の資源・資本を活用する程度が高いのである。

表 4-1 格差別同窓会支援の差異

OB・OG	N				
	I	II	III	IV	V
援助や支援をしてくれる (とても+まあそう思う)%	57.6	58.3	60.9	71.6	80.6
援助や支援をしてほしい (とても+まあそう思う)%	61.4	62.5	63.8	57.9	76.3
圧力を感じることがある (とても+まあそう思う)%	18.2	9.6	14.4	21.1	26.5
学校のサポート組織になれるか (とても+ややなれる)%	59.8	60.6	66.3	69.5	72.7

4. 3 学校システム・制度と同窓会支援の差異

表 4-2 で示したように、学校の仕事に同窓会や卒業生を活用することが役に立つかの程度によって、役に立つ(とても+ある程度)場合は、実際、同窓会・卒業生から支援の程度が高く、なお、支援をしてほしいと期待する程度も高い。サポート組織としてイメージも強いことがわかる。

表 4-2 仕事(授業、生徒指導・進路指導等)の活用程度別同窓会支援の差異

		援助や支援を してくれる (とても+まあそう思う)%	援助や支援を してほしい (とても+まあそう思う)%
		(同窓会や卒業生の活用)	とても役立つ(N=65)
	ある程度役立つ(N=335)	76.1	72.5
	あまり役立たない(N=263)	53.9	54.8
	ほとんど役立たない(N=99)	35.3	45.5

		圧力を感じることがある (とても+まあそう思う)%	学校のサポート 組織になれるか (とても+ややなれる)%
		(同窓会や卒業生の活用)	とても役立つ(N=65)
	ある程度役立つ(N=335)	17.3	74.9
	あまり役立たない(N=263)	16.3	57.0
	ほとんど役立たない(N=99)	24.3	34.3

4. 4 教師のライフステージ・ライフスタイルと同窓会支援

教員経験年数、教師の年齢、役職の地位別に同窓会支援の認識、期待、圧力、サポート組織イメージが異なる。本調査の結果、教員経験の年数別に同窓会支援の実態認識(とても+まあそう思う)は、31年以上、21-30年、11-20年の段階で高い。教師の年齢は40代、50代以上で同様の傾向がみられる。ただ、圧力を感じることは、教員経験年数10年以下、年齢は20代のほうが高い傾向にある。役職別では、校長、教頭の管理職、主幹や主任のほうが役職「なし」よりも同窓会の支援との関わりが強い。

また学校生活のどの部分に熱心に取り組むかのスタイルの項目からは、部活動に熱心である教師、部活動指導をしたくて教師になったと自覚する回答者ほど、同窓会の支援を意識している傾向がある。特に、教育改革に関して、地域等学校外の資源を教育内容・活動で活用することの重要性を認識する教師ほど、同窓会の支援関係に肯定的である。以上、学校格差、学校現場での活用程度、教育改革の外部資源への積極性は、同窓会の活用・資本の差異と相関があることが理解されよう。

(黄順姫)

5. まとめ

高校教師の属性、意識、行動を学校間格差という観点からみると、差のある項目と差のない項目がみられた。データより生徒の特質にも学校間格差がみられ、その生徒の特質に対応した指導を教師がおこなっている。高校の多様化政策や受験競争の緩和もあり、かつての高校と比べると格差は縮小しているが、経済的支援を必要として生徒や多様な生徒が非進学校に増えており、いっそうの社会的支援や個別指導が必要になっている。

(武内清)

<参考文献>

- 黄順姫(1998)『日本のエリート高校』世界思想社
- 黄順姫(2007)『同窓会の社会学』世界思想社
- 深谷昌志他(1983)『モノグラフ高校生'83 vol.10』福武書店
- 深谷昌志他(1990)『モノグラフ高校生'90 vol.28』福武書店
- 樋田大二郎他(2000)『高校生文化と進路形成の変容』学事出版

詳細は当時配布資料や近刊の報告書(中央教育研究所)を参照のこと。